

利根川におけるウナギ資源について（「ウナギの資源と保全」シンポジウム）

利根川では、現在でもウナギを対象とした漁業が盛んに行なわれており、漁獲される天然ウナギは1kg当たり3,000円から5,000円もする特産品ですが、近年漁獲量の減少が著しく資源の状態が危惧されています。

このため、当センターでは、利根川におけるウナギ漁業の振興を図るために、平成11年から15年までの5カ年間、ウナギ資源調査を行ないました。

天然のウナギについては、これまでにまとまった研究が行なわれておらず、今回の調査により全国的にも貴重な情報が得られるとともに、利根川での調査の重要性が明らかになりました。

このため、この結果について、平成16年7月29・30日に東京大学海洋研究所において東アジア研究者を対象として開催された、「ウナギの資源と保全」シンポジウムで発表を行ないました。

このシンポジウムでは、韓国、台湾、中国などの研究者を含めて約200人もの参加があり、ウナギの資源と保全にかかる17の演題が発表され、活発な討論が行なわれました。

シンポジウム概要

- 1 主 題 ウナギの資源と保全
- 2 開催場所 東京大学海洋研究所
- 3 開催日時 平成16年7月29・30日
- 4 主 催 東京大学21世紀COE「生物多様性・生態系再生」研究拠点
科学研究費補助金（学術創成研究：新プロ（DOBIS）
東アジア鰻資源連絡会
- 5 趣 旨 ウナギの資源に関する生物学的知見を整理し、これからの資源研究の展開を模索する。また、ウナギと人の関わりを考察し、ウナギとこれを取りまく淡水・汽水生態系の保全を目指す。
- 6 発表概要 講演題名 「利根川のウナギ」
発表者 千葉県内水面水産研究センター 資源環境研究室 梶山 誠
発表要旨 講演要旨をご覧ください。

（資源環境研究室）

ウナギの量産化技術に挑戦しています！



受精卵(受精後 25 時間経過。孵化までは、あと 10 時間程度かかりませう。

日本人にもっとも馴染みの深い淡水魚の一つであるウナギ。その生態については依然として推測の域を出ない部分が多い(但し、産卵場所については東京大学海洋研究所の二度の調査で、フィリピン東方の特定緯度を中心とする海域と結論が出された)。

ウナギ養殖(以下養鰻)の特殊性は元となる種苗(シラスウナギ)が 100 パーセント天然産に依存していることから分かる通り、年による好、不漁が経営を大きく左右するため、種苗の長期的な安定確保は養鰻業を営む上で、必要、欠くべからざる条件と言えます。

ウナギ人工種苗生産技術の研究は、昭和 35 年、東京大学農学部附属水産実験所が日本で最初に取り組み始め、以降、多くの研究機関が挑戦してきているところです。

本県では昭和 44 年からスタートしましたが、ウナギは複雑な生理、生態の要因を持つことから、この間、種苗生産の実現に相当の期間を費やしてきています。

ところが、昨年 7 月には三重県より吉報が届きました。長年の試験・研究が実を結び、独立行政法人水産総合研究センター養殖研究所で、人工受精卵からシラスウナギまでの飼育に世界で初めて成功したとの素晴らしいニュースでした。しかしながら、シラスウナギまで成長したのは 20 尾程度とわずかだったことは、量産化する上で最も重要な要因である、「良質な受精卵をより多く得るための技術開発」が、新たなハードルとして大きく立ちはだかつてきたといえます。



仔魚(孵化後 2 週間が経過)

当センターでは、人工的に催熟したウナギを用いて、自発的に卵を産んでもらうという誘発産卵を今年度のテーマとして試験を行っているところです。

近い将来、食卓に上るウナギの何%かは人口産が占められるように、がんばりたいと思います。

(養殖研究室)